原著論文

学級経営の困難さの状況とその対処に関する研究

片倉　徳生・三上　勝夫

（2018年12月27日受稿）

抄録：　管理職から見た学級経営の困難な状況の特徴とその対処を検討するために，北海道内33市部の公立小学校627校を対象に調査を行った．調査の結果，194校から回答があり，学級経営の困難な状況が生じた学校（経験校　72校）と生じなかった学校（未経験校122校）に分けて検討した．因子分析の結果，経験校の管理職は，「学習に臨む構えの欠如」，「教師への反発・授業妨害」，「教師への反抗・暴力」が，学級経営の困難な状況の特徴であると捉えた．具体的には，「授業中の私語が多く，教師の注意でやめない」「授業開始後も横を向いて座ったり，教科書やノートを出さなかったりする子の方が多い」が，一番割合が高く，17年前の調査と同様の結果であった．また，その対処として，「校内教育体制の確立と関係機関との連携・協力」「教師と児童との信頼関係の構築」など，多岐にわたり多面的な対処が大切であることが窺えた．

キーワード：学級経営の困難な状況，その対処，因子分析，管理職

Ⅰ．問題提起

学校は子どもたちにとって伸び伸びと過ごせる楽しい場となっているだろうか．小学6年生を対象とした文科省の全国学力・学習状況調査の質問紙調査[1]では，「学校に行くのは楽しいと思う」と答えた子どもたちは2017年では55.5％であった．この結果は，その年を含め過去5年間横ばい傾向にあり，6年生に限ってみると，半数ほどの子どもしか「楽しい」と感じていない．

このような現状の中，平成30年度（2018年度）より小学校では新学習指導要領の移行措置期間が始まった．その答申では，「生きて働く知識・技能の習得」など，これからの子どもの未来に向けて3つの資質・能力が提示された．そのための授業づくりでは，「主体的・対話的で深い学び」を実現した授業改善・工夫が求められている．その基盤となるのは，学習指導と生徒指導の両側面を充実させた学級経営の推進にある．

この学級経営に関して1990年後半ごろから，学校内で収めきれなくなった問題行動が続出し，マスコミ報道で一気に「学級崩壊」が注目を集めるようになった．今では「学級崩壊」は，「いじめ」「不登校」とともに，どの学級，どの学校にも起こりうる問題として社会的にも認知されるようになった．そして，小学校の「学級崩壊」は，中学校では「授業崩壊」から「学級の荒れ」さらには「学校の荒れ」へと展開されている．そこで，「学級崩壊」の現状を把握し，対処の仕方を探ることは，「学級崩壊」の予防はもとより，様々な教育問題への改善につながるものと考える．

Ⅱ．研究の背景と目的

「学級崩壊」について，国立教育研究所[2]（以下，国研）は「学級がうまく機能しない状態」という表現を用い，「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず，授業が成立しないなど，集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し，学級担任による通常の方法では問題解決ができない状態に至っている場合」と定義している．さらには，深谷ら[3]は「学

北海道文教大学大学院こども発達学研究科

級の荒れ」という表現を用い，段階的に捉える必要性を調査的に実証し，①何となくクラスがうまくいかない（第1段階・学級の崩れ），②子どもたちの気持ちが担任から離れてしまう（第2段階・学級の乱れ），③子どもたちが反発して授業が成り立たない（第3段階・学級の荒れ）に分けることを提唱した．北海道教育大学学級経営等に関する調査研究チーム[4]が（以下，北教大調査研究チーム）実施した調査では「学級崩壊」の用語を用いて，北海道全ての小学校を対象にしてアンケート調査を行い，回答のあった703校のうち100校が3年間に1件以上の「学級崩壊あるいはそのような問題」が起こったことを明らかにしている（出現率14.2％）．片倉[5]らは，管理職から見た学級経営の困難な状況が生じる要因とその学級担任像を検討した．調査の結果，学級経営の困難な状況を経験した学校（以下，経験校）と経験しない学校（以下，未経験校）とを比較して因子分析を行った結果，経験校の管理職は，学級経営の困難な状況が生じる要因を「教師の指導力」の問題だけではなく，「学校の組織力」や「家庭の教育力」「子ども自身の問題」など，多岐にわたり複合的な要因が積み重なって生じているものと認識していると指摘した．加えて，その学級担任は自己中心的に物事を考え，学習や生徒指導も十分に行うことができず厳格な態度で子どもと接し，同僚とも学級経営上の悩みを相談できないものとして教師像を抱いていることを明らかにした．

本研究でも，後藤らの研究[6]が用いた「学級経営の困難な状況」（以下，困難な状況）として用語を使用し，経験校と未経験校で比較検討することとした．

本研究では，これら事項を前提として，以下の3点を研究目的とした．

1．学級経営の困難な状況について，どのような特徴があるのかを検討する．

2．学級経営の困難な状況について，どのような対処の仕方があるのかを検討する．

3．1.と2.を検討することにより学級経営の困難な状況が生じないための予防的対策を探る．

Ⅲ．研究の方法

1．調査対象

調査対象は北海道内の33市部の公立小学校627校である．対象とした回答者は管理職（校長，教頭，主幹教諭等）である．

2．調査期日

2017年7月中旬から8月上旬

3．調査方法

1）実施方法

調査対象者に作成された調査用紙を郵送し，無記名での回答を求め，同じく郵送による回収を行った．

2）調査項目

5つの調査項目からなる．①基本的属性（学校規模，校区内の産業・環境など）．②2017年度1学期または過去3年間における学級経営の困難な状況の有無（状況が出現した場合は，3段階で分類）．③学級経営の困難な状況：「授業の開始時刻になっても教室に入らない，着席しない.」など（16項目）について，その頻度を5段階評定．④学級経営の困難な状況への対処：「学級定員を減らす」など（26項目）について，その程度を5段階評定．さらに，学級経営の困難な状況への対処については，上位3項目を選択してもらった．尚，この調査項目については，北教大調査研究チーム[4]が実施した「学級経営の困難等に関するアンケート調査」を基に加筆訂正し，本調査項目として使用した．また，深谷ら[3]の調査項目も一部採用した．

4．分析方法

調査項目③，④の5段階評定については，「1」には5点，「2」には4点，「3」には3点，「4」には2点，「5」には1点を与え，SPSSを用いて以下のような分析を行った．

1）学級経営の困難な状況についての検討

経験校と未経験校（以下，2つのグループ）毎に学級経営の困難な状況の出現頻度，評定値の平均値，標準偏差を算出する．また，評定値を便宜的に間隔尺度とみなして因子分析を行う．主因子法バリマックス回転により因子構造の単純構造化を図る．これらの統計分析を通して，2つのグループの学級経営の困難な状況の特徴を探る．

2）困難な状況への対処についての検討

2つのグループについて，評定値を便宜的に間隔尺度とみなして因子分析を行う．主因子法バリマックス回転により因子構造の単純構造化を図る．また，上位3項目の選択結果を比較検討する．これらの統計分析を通して，2つのグループの学級経営の困難な状況への対処について探る．

Ⅳ．結果と考察

1．調査結果

調査の結果，194校の有効回答数を得た．有効回答率は30.9％であった．194校中122校（出現率　62.9％　未経験校）が2017年度1学期並びに過去3年間，困難な状況が出現しなかったという回答であった．その一方で72校（出現率　37.1％　経験校）が何らかの困難な状況が出現した．

2．学級経営の困難な状況についての検討

1）学級経営の困難な状況の出現頻度

(1) 経験校の結果

図1から一番出現頻度が高かったのは，項目9「授業中の私語が多く，教師の注意でやめない」であった．“毎日のようにあった”が全体のほぼ半数を占めていた（47.9％）．次いで，項目2「授業開始後も横を向いて座ったり，教科書やノートを出さない子の方が多い」（毎日：43.7％），項目5「教師の注意や指示に反抗したり，無視したりする」（毎日：35.2％）の順で多い結果であった．また，項目2と5は，“2，3日おき程度にあった”まで含めて考えると，ほぼ同数の割合で発生していた．さらには，項目9と2については，北教大調査研究チーム[4]が行った結果と同様に1位と2位を占め，上位10位までは9項目と一致した．これにより，17年が経過しているが，項目9と2は何年経っても変わらない特徴であると言える．

(2) 未経験校の結果

図2から未経験校では，どの項目も“なかった”が圧倒的に多かった．しかも，“わからなかった”と回答が見られたのは，項目16.だけであった．このことからも，未経験校では16項目の事柄がほとんど出現しなかったことが窺える．経験校と比較すると，“毎日のようにあった”と“2，3日おき程度にあった”の出現頻度を合わせても，かなり少なかった．この頻度を合わせると，項目2と9が同数の割合で出現し，出現率は低いものの経験校の特徴と一致した結果であった（17.2％）．

2）因子分析結果

2つのグループにおいて，16項目の平均値で天井効果並びにフロア効果は見られなかった．併せて，KMO及びBarlettの球面性検定では困難な状況の経験校（KMO .896　Barlettの球面性検定　p<．01），困難な状況の未経験校（KMO .832　Barlettの球面性検定　p<．01）において，ともにKMOの値が0.50より大きく，有意確率も0.01よりも小さいことから2グループごとで因子分析を行った．その結果を示したのが表1，2である．因子の解釈にあたっては，1つの因子に0.550以上の因子負荷量を示した項目を主たる手掛かりとした．

(1) 経験校の因子分析結果

このグループでは固有値の値，並びに因子ごとの意味のまとまりのよさを考慮して，3因子解14項目を採用することとした．また，解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は65.965％であった．第1因子で高い負荷量を示した項目は，「8.トイレなどの口実をつけて，授業から抜け出そうとする」（0.745）など8項目である．

“授業から抜け出す”“無断で教室の外に出て

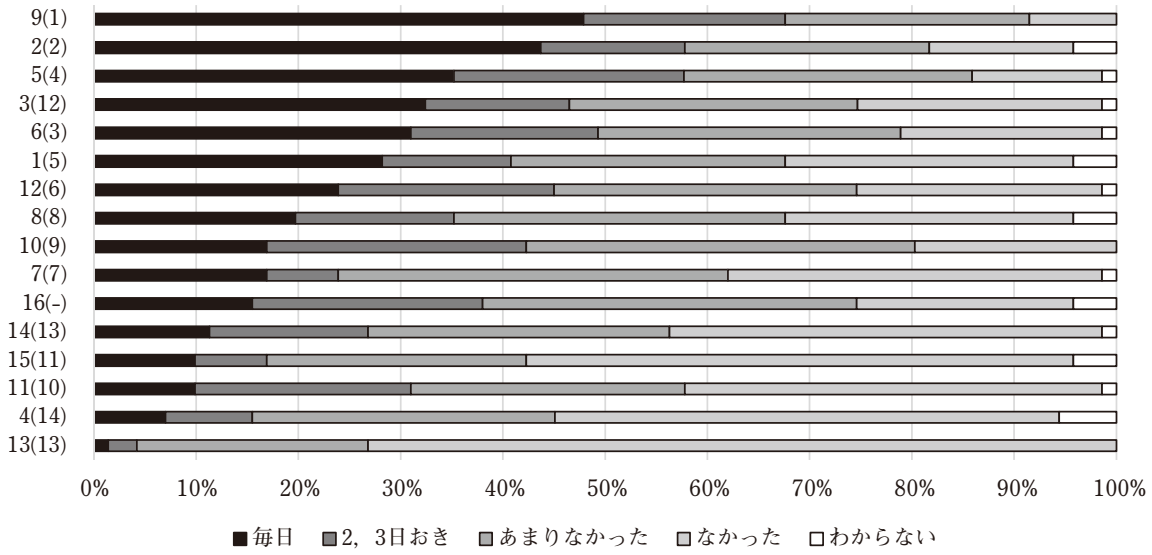

図1 経験校の学級経営の困難な状況の特徴（出現度数〈%〉）（ ）内数値：北教大調査研究チームの順位
n=71

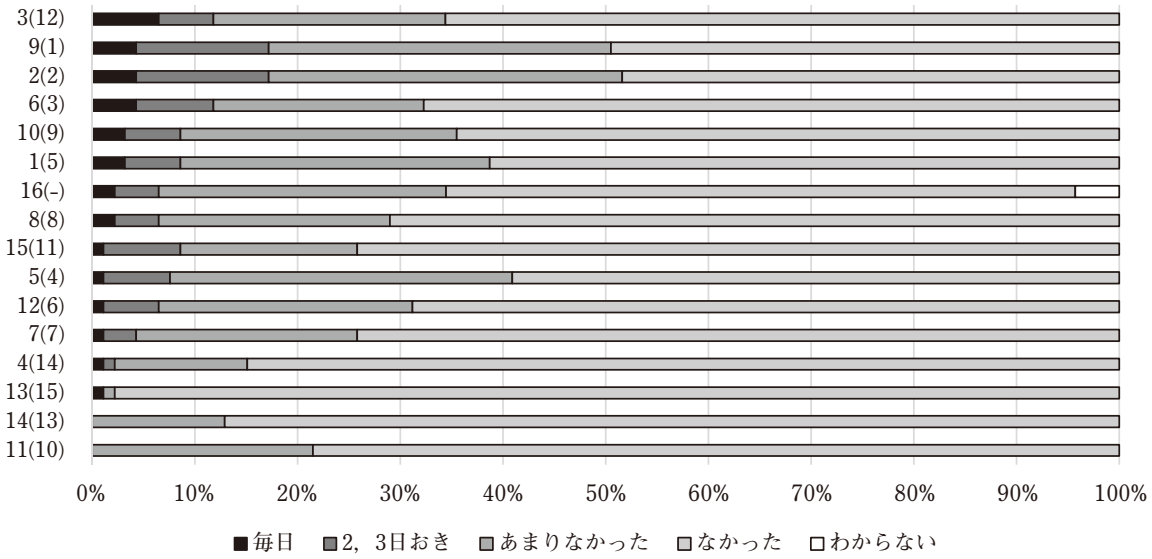

図2 未経験校の学級経営の困難な状況の特徴（出現度数〈%〉）（ ）内数値：北教大調査研究チームの順位
n=93

いく”“教室に入らない，着席しない”“教科書やノートを出さない”などのキーワードから，第1因子を「学習に臨む構えの欠如」と命名した．第2因子で高い負荷量を示した項目は，「9.授業中の私語が多く，教師の注意でやめない」(0.799) など5項目である．また，この因子には，出現頻度の順位が高い項目が含まれており，困難な状況の重要な因子であると考えられる．“教師の注意でやめない”“教師に反抗したり，無視したりする”“授業妨害”“教師の制止が通らなくなる”などのキーワードから，第2因子を「教師への反発･授業妨害」と命名した．第3因子での項目は，「13.教師に暴力をふるう」(0.552) の1項目のみであった．また，負荷量が0.550以上ではないが，第2因子を構成する項目14.と5.では第3因子においても，高い負荷量が見られる．そこで，第3因子を「教師への反抗･暴力」と命名した．

(2) 未経験校の因子分析結果

このグループでは固有値の値，並びに因子ご

表1　経験校の「学級経営の困難な状況」　n=71

項　目　番　号	因　子		
	1	2	3
8. トイレなどの口実をつけて，授業から抜け出そうとする	0.745	0.371	0.260
4. 配布したプリントをわざと破ったり，捨てたりする	0.647	0.192	0.374
6. 授業中に勝手に教室を歩き回る	0.644	0.518	0.034
1. 授業の開始時刻になっても教室に入らない，着席しない	0.632	0.439	0.053
7. 授業中，無断で教室の外に出ていく	0.629	0.417	0.310
3. 授業中，寝ていたり，授業に関係のないことをしている（例　マンガを読んだり，学用品で遊ぶなど）	0.580	0.410	0.031
15. 教師に抱っこを求めたり，気を引こうとするなど，甘えの行動が多く授業の妨げになる	0.563	-0.049	0.160
2. 授業開始後も横を向いて座ったり，教科書やノートを出さない子の方が多い	0.551	0.520	0.051
9. 授業中の私語が多く，教師の注意でやめない	0.226	0.799	0.002
12. 少数の子どもの行為が周囲の子どもに広がり，授業にならない	0.492	0.667	0.081
5. 教師の注意や指示に反抗したり，無視したりする	0.177	0.659	0.405
14. 授業妨害，教師に対する嫌がらせに対して周囲の子が同調する	0.255	0.614	0.523
11. 授業中に誰かをはやしたり，いじめが発生し，教師の制止が通らなくなる	0.388	0.610	0.337
10. 授業中の口げんかや小暴力が発生し，教師が注意しても静まらない	0.494	0.519	0.217
16. 先生の言うことを馬鹿にしたり，家で教師の不満を口にしたりする	0.063	0.368	0.230
13. 教師に暴力をふるう	0.133	0.082	0.552
固有値	8.032	1.340	1.183
因子寄与率	50.197	8.373	7.395

表2　未経験校の「学級経営の困難な状況」　n=93

項　目　番　号	因　子			
	1	2	3	4
2. 授業開始後も横を向いて座ったり，教科書やノートを出さない子の方が多い	0.701	0.103	0.029	0.006
3. 授業中，寝ていたり，授業に関係のないことをしている（例　マンガを読んだり，学用品で遊ぶなど）	0.701	0.195	0.218	0.004
1. 授業の開始時刻になっても教室に入らない，着席しない	0.699	0.209	0.107	0.097
6. 授業中に勝手に教室を歩き回る	0.603	0.447	0.173	0.051
9. 授業中の私語が多く，教師の注意でやめない	0.584	0.451	0.100	-0.001
7. 授業中，無断で教室の外に出ていく	0.532	0.388	0.170	0.472
4. 配布したプリントをわざと破ったり，捨てたりする	0.524	0.128	0.396	0.196
11. 授業中に誰かをはやしたり，いじめが発生し，教師の制止が通らなくなる	0.099	0.742	0.300	0.148
12. 少数の子どもの行為が周囲の子どもに広がり，授業にならない	0.293	0.687	0.165	0.377
15. 教師に抱っこを求めたり，気を引こうとするなど，甘えの行動が多く授業の妨げになる	0.143	0.646	-0.047	0.073
8. トイレなどの口実をつけて，授業から抜け出そうとする	0.383	0.566	0.289	0.008
5. 教師の注意や指示に反抗したり，無視したりする	0.314	0.566	0.428	0.007
10. 授業中の口げんかや小暴力が発生し，教師が注意しても静まらない	0.411	0.565	0.140	0.052
16. 先生の言うことを馬鹿にしたり，家で教師の不満を口にしたりする	0.132	0.084	0.823	0.063
14. 授業妨害，教師に対する嫌がらせに対して周囲の子が同調する	0.184	0.353	0.549	0.221
13. 教師に暴力をふるう	-0.003	0.109	0.127	0.888
固有値	8.032	1.340	1.183	1.183
因子寄与率	50.197	8.373	7.395	7.395

との意味のまとまりのよさを考慮して，4因子解13項目を採用することとした．また，解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は73.360％であった．第1因子で高い負荷量を示した項目は，「2.授業開始後も横を向いて座ったり，教科書やノートを出さない子の方が多い」(0.701) など5項目である．“教科書やノートを出さない”“授業に関係のないことをしている”“教室に入らない，着席しない”“勝手に教室を歩き回る”などのキーワードから，第1因子を「学習に臨む構えの欠如」と命名した．第2因子で高い負荷量を示した項目は，「11.授業中に誰かをはやしたり，いじめが発生し，教師の制止が通らなくなる」(0.742) など6項目である．また，“いじめが発生し，教師の制止が通らなくなる”“授業にならない”“甘えの行動が多く授業の妨げになる”“授業から抜け出そうとする”“教師に反抗したり，無視したりする”“教師が注意しても静まらない”などのキーワードから，第2因子を「教師への反発・授業妨害」と命名した．第3因子での項目は，「16.先生の言うことを馬鹿にしたり，家で教師の不満を口にしたりする」(0.823) の1項目のみである．また，負荷量が0.550以上ではないが，項目14.も教師の指導に対する不満が感じられる項目である．そこで，第3因子を「教師への不満」と命名した．第4因子も，「13.教師に暴力をふるう」(0.888) の1項目のみであった．この1項目だけで解釈することは難しいが，高い負荷量だけに無視できない因子である．そこで，第4因子を「教師への暴力」と命名した．

3）学級経営の困難な状況の特徴についての考察

因子分析の結果から，経験校と未経験校の管理職は，「学習に臨む構えの欠如」「教師への反発・授業妨害」「教師への反抗・暴力」として学級経営の困難な状況の特徴を捉えていることが明らかとなった．

「学習に臨む構えの欠如」では，未経験校において教室内の行動として止まっているが，経験校では項目4.7.8.15.の4項目から授業を抜け出して教室外に出たり，プリントを破ったり捨てたりといった無秩序状態になっていることが窺える．「教師への反発・授業妨害」では，経験校と未経験校において項目5.11.12.の3項目が共通している．2つのグループにおいて教師へ反発し，少数の子どもたちの行為が周囲にも広がり，誰かをはやし立てたり，いじめにも及んだりしている様子が垣間見られる．未経験校の項目8.15.の2項目は，経験校では「学習に臨む構えの欠如」を構成していることから，未経験校は，「学習に臨む構えの欠如」も混在する中で教師への反発や授業妨害が見られるようである．そして，経験校では項目9の出現頻度が一番高く，負荷量も高いこと，そして項目12.や14.から，教師への反発に同調する子どもたちの広がりといったものが感じられる．「教師への反抗・暴力」は，未経験校であっても出現することが窺える．しかし，未経験校では，項目13.の1項目だけが高い負荷量を示しただけで，次に負荷量が高かったのは項目7.と12.である．この3項目の関連を見ると，まとまりに欠けるように思われる．よって，未経験校の「教師への暴力」については，今後さらに検討する必要がある．また，未経験校の特徴として，「教師への不満」が挙げられる．教師への不満が反抗や無視といった態度に現れ，周囲の子にも広がっていくことが推測される．そのため，学級経営の困難な状況を生じさせない予防策としては，「教師への不満」をつくらない教師と子どもとの関係づくりが大切である．その点では未経験校の因子であるが，今後の学級経営の困難な状況を考える上で見逃せない特徴と言える．さらには，各学年でどのような特徴が見られるのかを検討することも，学級経営の困難な状況を予防する観点から重要である．ただ今回の調査では経験校の有効回答数から検討することができなかったので，今後の課題と言える．

2. 困難な状況への対処についての検討

1）因子分析結果

2つのグループにおいて，26項目すべての平均値で天井効果並びにフロア効果は見られなかった．併せて，KMO及びBarlettの球面性検定では，困難な状況の経験校（KMO .757　Barlettの球面性検定　p<．01），困難な状況の未経験校（KMO .878　Barlettの球面性検定　p<．01）において，ともにKMOの値が0.50より大きく，有意確率も0.05よりも小さいことから2グループごとに因子分析を行った．因子分析の結果については表3，4に示したとおりである．また，因子の解釈にあたっては，1つの因子に0.500以上の因子負荷量を示した項目を主たる手掛かりとした．

(1) 経験校の因子分析結果

このグループでは固有値の値，並びに因子ごとの意味のまとまりのよさを考慮して，7因子解20項目を採用することとした．解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は66.543％であった．第1因子で高い負荷量を示した項目は，「16.中堅・ベテラン教員に対し，子ども理解，新しい教育方法などについての研修機会を実施する」（0.765）など8項目である．“特別な教育的配慮を要する子どもに対処する体制”“若い教員に対する指導・支援”“学年ブロック，学校全体の協力体制”から校内教育体制の確立の重要性が窺える．加えて，“専門機関や教育・研究機関との連携，さらにはスクール・カウンセラーとの協力体制”から関係機関との連携・協力の重要性も窺える．これらから，第1因子を「校内教育体制の確立と関係機関との連携・協力」と命名した．第2因子から第7因子までについても，その因子を構成する項目のキーワードから以下のように命名した．尚，第4因子については，負荷量が0.500以上ではないが，項目14.と22からも参考にした．第2因子「教師と児童との信頼関係の構築」（3項目），第3因子「幼保や保護者・地域との連携」（3項目），第4因子「学級のきまりの徹底と校内体制の確立」（2項目），第5因子「学級の少人数化」（2項目），第6因子「教員の専門性の発揮」（1項目），第7因子「学校教育以外の諸要因」（1項目）と命名した．

(2) 未経験校の因子分析結果

このグループでは固有値の値，並びに因子ごとの意味のまとまりのよさを考慮して，6因子解24項目を採用することとした．解釈を試みた因子全体に対する累積寄与率は72.230％であった．第1因子で高い負荷量を示した項目は，「15.新任などの若い教員に対する指導，支援を充実させる」（0.802）など6項目である．“気軽に相談できる職場づくり”“特別な教育的配慮を要する子どもに対処する体制”“中堅・ベテラン”“学年ブロック，教員に対する研修機会の実施“などのキーワードから，第1因子を「校内教育体制の確立」と命名した．第2因子から第6因子までについても，その因子を構成する項目のキーワードから以下のように命名した．第2因子「教師と児童との信頼関係構築に向けたサポート体制」（5項目），第3因子「幼保や保護者・地域との連携・協力」（4項目），第4因子「関係機関との連携・協力」（4項目），第5因子「学校教育の限界と教育の維持」（3項目），第6因子「個に応じた指導の充実」（2項目）と命名した．

2) 困難な状況への主な対処に関する結果

（3項目選択）

「学級経営の困難な状況への対処」について，大切であると思われるものを3つ選択してもらった（複数回答）．その結果が図3である．横軸に各項目，縦軸に選択した学校数の割合を示している．経験校で一番高い割合を示したのは，項目11.「特別な教育的配慮を要する子どもに対処するための体制をつくる」（15.2％）であった．これに，項目6.「教師が楽しく分かりやすい授業づくりを行う」（11.9％），項目1.「学級定員を減らす」（10.0％）10.「学級担任が一人で対処するのではなく，早い段階で学年ブロック，学校全体の協力体制をつくる」（9.0％）が続いている．今回の調査で一番割合の高かった項目11.は北教大調査研

表3　経験校の「学級経営の困難な状況」への対処　n=71

項目番号	因子 1	2	3	4	5	6	7
16. 中堅・ベテラン教員に対し，子ども理解，新しい教育方法などについての研修機会を実施する	0.765	0.403	0.112	0.137	-0.002	-0.025	-0.024
11. 特別な教育的配慮を要する子どもに対処するための体制をつくる	0.688	0.002	0.112	0.164	0.047	-0.071	-0.261
15. 新任などの若い教員に対する指導，支援を充実させる	0.654	0.283	0.126	0.323	-0.057	-0.060	0.087
20. 児童相談所などの児童福祉相談機関や医療などの専門機関との協力体制をつくる	0.647	0.106	0.206	0.156	0.097	0.079	0.004
18. スクール・カウンセラーの配慮を進め，協力体制をつくる	0.631	0.204	0.575	-0.123	0.052	0.256	-0.101
19. 大学・教育研究所などの教育・研究機関との協力体制をつくる	0.610	-0.060	0.358	-0.066	0.243	0.187	0.015
17. 養護教諭からの情報・アドバイスを生かす体制をつくる	0.602	0.231	0.184	0.134	-0.071	0.038	-0.066
10. 学級担任が一人で対処するのではなく，早い段階で学年ブロック，学校全体の協力体制をつくる	0.502	-0.126	-0.098	0.345	-0.009	0.220	-0.054
7. 学級担任が一人一人の子どもに共感的に接し，児童理解を進める	0.062	0.903	0.068	0.084	0.224	0.165	-0.081
6. 教師が楽しく分かりやすい授業づくりを行う	0.301	0.748	0.048	0.188	0.151	-0.149	0.126
9. 学級担任と子どもとの温かいふれあいの中で，信頼関係回復に努める	0.134	0.653	0.210	0.206	-0.108	0.108	-0.052
23. 小学校と幼稚園や保育所との連携，相互交流を進め，入学前の子どもの状況を詳しく把握する	0.293	0.047	0.681	0.067	0.013	-0.015	-0.032
24. 子どもが安心して遊べる場所づくりなど，地域における子育ての環境を整える	0.077	0.266	0.637	0.391	0.236	0.157	0.253
5. 当該学級担任の心のケアを図る	0.158	0.056	0.528	0.096	-0.021	0.035	-0.374
21. 保護者や PTA との話し合いの場を増やし，協力体制を緊密にする	0.257	0.240	0.480	0.388	0.162	0.061	0.041
12. 学級集団に話し方や人の話の聞き方など，学級のきまりをしっかりとしつける	0.152	0.199	0.110	0.607	0.265	0.158	0.093
13. 校長が強いリーダーシップを発揮して，解決に向けての体制をつくる	0.297	0.174	0.154	0.575	-0.050	0.150	-0.036
14. 同僚や管理職と気軽に相談できるような職場づくりをする	0.303	0.314	0.154	0.496	-0.122	-0.382	-0.240
22. 家庭でのしつけ，規則正しい生活・学習習慣などについて，保護者に協力を求める	0.188	0.325	0.313	0.468	0.243	0.105	0.267
1. 学級定員を減らす	0.011	0.027	0.171	-0.028	0.702	0.040	-0.048
2. ティームティーチングや学習内容の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導の時間を増やす	0.044	0.106	-0.058	0.127	0.573	0.040	-0.133
3. 一人担任制を改め，教科担任制（専科など）などを取り入れる	0.012	0.070	0.290	0.133	0.282	0.503	0.051
4. 授業研究や学級経営の交流など，校内研修を充実させる	0.424	0.376	0.121	0.196	0.064	0.490	-0.220
8. 教師が子どもに対して権威を保つようにする	0.206	0.050	-0.050	0.331	-0.139	0.476	0.334
25. 子どもが成長する過程での出来事であり，過大視すべきではない	-0.046	0.102	-0.008	0.133	-0.078	0.012	0.570
26. 問題はもっぱら家庭教育に起因するものであり，学校での対応には限界がある	-0.105	-0.185	-0.024	-0.087	-0.081	0.051	0.336
固有値	7.966	2.299	1.973	1.805	1.425	1.216	1.131
因子寄与率	30.637	8.843	7.589	6.941	5.481	4.679	4.350

究チーム[4] が行った結果では，11番目の相対的重要度・緊急度であった．一方で，項目20.17.8.は，経験校では相対的重要度・緊急度は見られなかった．このことから，経験校において特別な教育的配慮を要する子どもに対処するための校内教育体制が重要視されているように思われる．

3）学級経営の困難な状況への対処に関する考察

因子分析の結果から学級経営の困難な状況を経験している管理職は，その対処を「校内教育体制の確立と関係機関との連携・協力」「教師と児童との信頼関係の構築」「幼保や保護者・地域との連携」「学級のきまりの徹底と校内体制の確立」「学級の少人数化」「教員の専門性の発揮」と捉えているようである.また，経験校の5因子が未経験校とほぼ共通・類似した対処の仕方であった．併せて，これらの対処は，学級経営の困難な状況の要因と表裏一体の関係にあり，学級経営の困難な状況に対して多岐にわたり多面的に対処しなければならない現状が垣間見られる．特に，「校内教育体制の確立と関係機関との連携・協力」では未経験校において，それぞれが独立した因子（第1因子と第4因子）として抽出されていた．しかし，経験校では校内教育体制だけではなく関係機関と連携・協力しなければ対処できないという「学級経営の困難な状況」に対する切実さが感じられる．加えて第1因子の項目11.の因子負荷量と相対的重

表4　未経験校の「学級経営の困難な状況」への対処　n=94

項　目　番　号	因　子					
	1	2	3	4	5	6
15. 新任などの若い教員に対する指導，支援を充実させる	0.802	0.323	0.165	0.184	-0.029	0.165
14. 同僚や管理職と気軽に相談できるような職場づくりをする	0.764	0.200	0.322	0.285	0.207	-0.001
12. 学級集団に話し方や人の話の聞き方など，学級のきまりをしっかりとしつける	0.701	0.411	0.215	0.065	0.052	0.181
16. 中堅・ベテラン教員に対し，子ども理解，新しい教育方法などについての研修機会を実施する	0.684	0.363	0.201	0.176	-0.037	0.122
11. 特別な教育的配慮を要する子どもに対処するための体制をつくる	0.662	0.335	0.119	0.130	0.116	0.305
13. 校長が強いリーダーシップを発揮して，解決に向けての体制をつくる	0.538	0.167	0.354	0.292	0.228	-0.025
9. 学級担任と子どもとの温かいふれあいの中で，信頼関係回復に努める	0.286	0.733	0.171	0.052	0.080	0.138
7. 学級担任が一人一人の子どもに共感的に接し，児童理解を進める	0.262	0.727	0.240	0.263	0.012	0.200
6. 教師が楽しく分かりやすい授業づくりを行う	0.380	0.692	0.249	0.279	-0.107	0.208
10. 学級担任が一人で対処するのではなく，早い段階で学年ブロック,学校全体の協力体制をつくる	0.323	0.684	0.246	0.168	0.109	0.048
5. 当該学級担任の心のケアを図る	0.231	0.600	0.070	0.051	0.291	0.075
23. 小学校と幼稚園や保育所との連携，相互交流を進め，入学前の子どもの状況を詳しく把握する	0.229	0.300	0.830	0.110	0.242	0.043
24. 子どもが安心して遊べる場所づくりなど，地域における子育ての環境を整える	0.244	0.204	0.774	0.251	0.153	0.100
21. 保護者や PTA との話し合いの場を増やし，協力体制を緊密にする	0.220	0.068	0.695	0.277	0.060	0.100
22. 家庭でのしつけ，規則正しい生活・学習習慣などについて，保護者に協力を求める	0.232	0.371	0.547	0.353	0.215	-0.049
18. スクール・カウンセラーの配慮を進め，協力体制をつくる	0.296	0.198	0.335	0.672	0.057	0.110
17. 養護教諭からの情報・アドバイスを生かす体制をつくる	0.425	0.245	0.248	0.596	0.078	-0.173
20. 児童相談所などの児童福祉相談機関や医療などの専門機関との協力体制をつくる	0.227	0.171	0.407	0.563	0.095	0.242
19. 大学・教育研究所などの教育・研究機関との協力体制をつくる	0.088	0.035	0.388	0.548	0.115	0.286
26. 問題はもっぱら家庭教育に起因するものであり，学校での対応には限界がある	-0.060	0.018	0.050	-0.024	0.690	-0.057
8. 教師が子どもに対して権威を保つようにする	0.198	0.155	0.129	0.096	0.563	0.0
1. 学級定員を減らす	0.204	0.132	0.270	0.226	0.516	0.205
3. 一人担任制を改め，教科担任制（専科など）などを取り入れる	0.051	0.136	0.011	0.379	0.409	0.163
25. 子どもが成長する過程での出来事であり，過大視すべきではない	-0.071	-0.233	0.092	-0.015	0.299	0.106
2. ティームティーチングや学習内容の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導の時間を増やす	0.279	0.247	0.019	0.129	0.354	0.599
4. 授業研究や学級経営の交流など，校内研修を充実させる	0.237	0.323	0.247	0.276	-0.042	0.512
固有値	11.259	2.292	1.766	1.228	1.215	1.020
因子寄与率	43.303	8.816	6.791	4.723	4.673	3.924

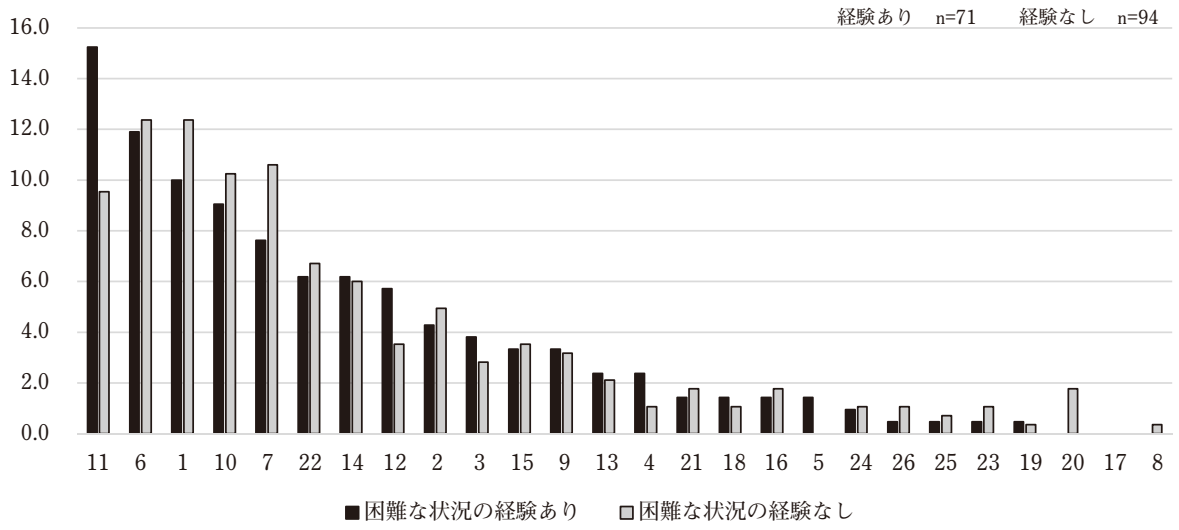

図3 学級経営の困難な状況への対処（3項目選択）縦軸：選択度数　横軸：各項目

要度・緊急度から，特別支援教育などの今日的課題に対して，様々な関係機関と連携・協力しなければならない学級経営上の課題と窮状が窺える．

また，「教師と児童との信頼関係の構築」では，その構成因子である項目6.が3項目選択においても経験校（2番目）と未経験校（1番目）で高い割合を示した．尚，この項目は北教大調査研究チーム[4]が行った結果でも3番目に高い割合であった．このことからも，楽しく分かりやすい授業づくりを進める上で教師と子どもとの信頼関係の構築が学級経営の困難な状況を対処するためにも重要であり，何年たっても学級経営の基盤であることがここでも窺える．さらには，楽しく分かりやすい授業づくりのために，TTや習熟の程度に応じた学習指導のための「学級の少人数化」や校内研修を充実させた「教員の専門性の発揮」は相互関連性があるように推察できる．

そして，「学級のきまりの徹底とその体制づくり」や「教員の専門性の発揮」は経験校だけに見られる対処であった．「学級のきまりの徹底とその体制づくり」は，学級経営の困難な状況の特徴からも関連性が窺える．つまり，教室内外で見られる「学習に臨む構えの欠如」に対して，学習や生活習慣の定着に向けて教員が統一して指導にあたらなければならない．

Ⅴ．総合的考察

本研究では実際に経験した「学級経営の困難な状況」についても，その特徴と対処を自由記述してもらった．表5は経験校9校での11事例を段階ごとにまとめたものである．

そこで，本研究で明らかになった「学級経営の困難な状況」の特徴とその対処について，11事例からも検討し，「学級経営の困難な状況」を予防するための方策を探ることとする．

まず，学級経営の困難な状況の特徴について，事例から考察してみる．事例から第3段階になるほど，困難な状況が悪循環となり手がつけられない状況になっていることが窺える．そして，事例

表5　困難な状況と対処の事例（自由記述）n=71

○第 1 段階（学級の崩れ）
①「第 4 の～」にあてはまる子が入学当初から，立ち歩き，授業の妨害，乱暴等の言動を見せた．まず担任には保護者との信頼関係構築を図るように伝えた．子を低学年から力で抑え，注意していくと，中→高学年になるにしたがって，手に負えない，手がつけられず，困難な状況が生まれるケースがある．
○第 2 段階（学級の乱れ）
②学級が進級し，担任が代わって落ち着いた．
③数回の保護者説明会を開くなどの対応をしたが，事態は改善されず，担任を代えた．担任交代後は，ある程度の落ち着きがみられ，何とか卒業までこぎつけたが，中 1 と中 2 で困難な状況が再び起きていたようである．
○第 3 段階（学級の荒れ）
④まず一人の子の反抗から始まり，それに同調する子が数名となり，教師の対応がうまくいかないと全体が教師から離れる．教師の感受力の問題もある．子供がなぜいうことを聞かないのか，理由をしっかり受け止められないと状況は悪くなる．毎年，学級編制を行う．担任を代える等で対応している．もちろん，研修で職員の資質能力も図っている．
⑤生徒指導を他の教員，教頭がカバー，学年で対応するなどして，授業づくりと児童理解に専念してもらったが，全く変化がなかった．保護者会を開き，保護者に授業を見てもらうなどしたが，授業自体も遅れがちになり，改善が見られなかったため，急遽 2 学期から担任を交代した．その後，教頭と新担任との協力で児童も落ち着いて学習できるようになった．
⑥子供が言うことを聞かないので，体罰でいうことを聞かせようとしたが，子供たちの気持ちが離れてしまい，学級崩壊となった．
⑦ 22 名中特別な配慮を要する児童が 5 名存在しているにもかかわらず，適切な支援体制が組まれずに持ち上がった 2 年生．
⑧特別な配慮を要する児童がきっかけとなり，問題行動やトラブルの多い実態でありながら，人事異動で転入となった教諭（40 代後半）に担任を持たせた．
⑨分かりづらい指導で集中が続かない一部の子への叱責を続け，教師との関係性ができなかった．
⑩新年度→子供の気持ちが把握できない→授業がつまらない→話を聞かなくなる→反抗する→授業にならない→親から一方的な批判→親の協力もなし→管理職等授業参加→先生休職→担任交換→学校人員不足　の悪循環
⑪担任に対し管理職，教務主任が面談を定期化し，授業づくり講座 30 分程度毎日実施．大きな改善はなく 1 年が終了．担任の資質は大きい！

①，④，⑥，⑨，⑩からは，本研究で明らかとなった「学習に臨む構えの欠如」「教師への反発・授業妨害」「教師への反抗」を裏付ける状況を読み取ることができる．ただ，本研究での「教師への暴力」については自由記述からは探ることはできなかった．これらの事例との関連から低学年のうちに学習規律などの学習に臨む構えをしっかり身に付けることが大切である．また，力で子どもたちを抑え込むことが，子どもたちへの教師への不満となり，同調者を生み，手がつけられない状況になってしまうことが窺える．子どもたちには明確な理由を納得するまで指導し，できた時には教師が認め励ます姿勢や根気強さが求められる．

次に，「学級経営の困難な状況」への対処について，事例から考察してみる．事例から本研究で明らかとなった「校内教育体制の確立と関係機関との連携・協力」「教師と児童との信頼関係の構築」「保護者との連携・協力」「学級のきまりの徹底とその体制づくり」「教員の専門性の発揮」との関連が窺える．特に，事例④，⑩からは，「教員の専門性の発揮」の重要性が感じられる．つまり，子どもたちに分かりやすい授業づくりのための校内研修を活性化させ，教員の資質・能力を向上させることが不可欠であると考える．

そして，事例②，③，④，⑤，⑩からは，学級担任を代える対処により，学級が落ち着いた事例が挙げられている．この対処は本調査では得られなかった結果であり，11事例の中で唯一うまくいった対処である．ただ今後検討する必要があるものの，いくつかの課題がある．その一つとして担任を交代させられた教員への配慮である．事例⑩にもあるように年度途中で交代させられた教員は教員としての誇りや自信が喪失し，精神疾患等により休職せざるを得ない状況に追い込まれているものと推察できる．文部科学省の平成29年度学校教職員の人事行政状況調査[7]によると，平成29年度には全国で5,077人の教員が精神疾患により休職しており，最近25年で4倍超になった，と報告している．休職者が高止まりしている背景には，多忙化などによるストレスがある，と指摘している．担任を交代させることは一つの対処であると考えられるが，学級経営上の問題を学級担任一人が抱え込まないチーム学校としての体制づくりが第一であると考える．また，T.T，交換授業，合同授業など教師同士が連携・協働する学校運営上の工夫・改善が不可欠である．そのために，学校運営の最終責任者である校長は，一人一人の教師の長短や持ち味をしっかりと把握し，教師が最高の教育力を発揮できるような組織体制をつくり，どんなことでも気軽に相談できる「開かれた関係」が構築できるリーダーシップを発揮する必要がある．

最後に，前述で本研究結果から指摘した特別支援教育への組織的な対応の視点から考察する．本研究では17年前の北教大調査研究チーム[4]が行った調査と異なり，「学級経営の困難な状況」への対処として，「特別な教育的配慮を要する子どもに対処するための体制づくり」が相対的重要度・緊急度が高いという結果であった．文部科学省の平成24年度に公表した発達障害教育関連調査[8]では，学習面または行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が6.5％（推定値）と示された．伊藤ら[9]はこの結果を受け補足調査を行ったところ，小学校では82.7％の教員が6.5％より多く在籍していると捉えている，と報告している．また，通級指導教室は発達障害のある子どもへの教育的資源として重要な役割を果たしているものの，在籍学級との連携並びに他校からの通級など，運用面や環境づくりに課題がある，と指摘している．今後益々，子どもへの指導･支援，保護者への支援，教員への支援を含む校内全体への支援など，通級指導教室の重要度が増すものと考えられる．そのためにも，自校での通級指導教室の設置や校内取り出し指導が受けられる体制づくり，すなわち教員定数配置の見直しを図ることも，「学級経営の困難な状況」への不可欠な対処であると考える．

謝　辞

本研究を進めるにあたり本調査にご協力いただいた道内小学校の校長先生はじめ管理職の皆様に厚くお礼申し上げる. ここに附記して謝意を表す.

文　献

1) 国立教育研究所：平成29年度全国学力・学習状況調査報告書，2017
2) 国立教育研究所（学級経営研究会）：学級経営の充実に関する調査研究．平成10年・11年度文部省委託研究中間報告，1999.
3) 深谷昌志・土橋稔・鶴巻景子・島田美佐江・三枝恵子・戸塚智・深谷和子：「学級の荒れ」をどうとらえるか（教師調査）モノグラフ・小学生ナウ．ベネッセ教育総合研究所，19（2）:2-101, 1999.
4) 北海道教育大学学級経営等に関する調査研究チーム：学級経営の困難等に関するアンケート調査．北海道教育大学教育実践総合センター，2001.
5) 片倉徳生・後藤広太郎・後藤守：学級経営の困難さと教師像に関する研究．北海道文教大学研究紀要，42:39-50，2018
6) 後藤広太郎・川端愛子・後藤守：教職志望学生から見た「学級経営上の困難さ」のイメージ．北海道教育大学大学院研究紀要，12:23-33，2014.
7) 文部科学省：平成29年度学校教職員の人事行政状況調査．http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1411823_01.pdf（2018.12.26 確認）
8) 文部科学省：「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」調査結果．http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/__icsFiles/afieldfile/2012/12/10/1328729_01.pdf. 2012.
（2018.12.25　確認）
9) 伊藤由美・柘植雅義・梅田真理・石坂務・玉木宗久：「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の補足調査の結果からみた通級指導教室の役割と課題．国立特別支援教育総合研究所研究紀要，42:27-39, 2015.

A Study on the Difficulties in Classroom Management and the Coping Strategies

KATAKURA Norio and MIKAMI Katsuo

Abstract: In order to examine the characteristics of difficult class management situation from the viewpoint of managerial staff, the authors of this study surveyed 627 public elementary schools in 33 cities in Hokkaido. The 194 schools responded the survey were divided into two groups: 72 schools where difficult classroom management situation occurred; and 122 schools where the difficult situation did not occur. As a result of the factor analysis, the managers at the former group of schools characterized the situation of difficult classroom management as follows: "lack of motivation for learning", "repulsion for teachers / interference with classes" and "rebellion / violence against teacher". Specifically, situations that occurred most frequently were: “students engage in unrelated conversation during the class and do not stop doing so when commanded not to"; and "many students sit looking sideways even after class started, and do not take out their textbooks and notes". The above is the same result from a similar investigation undertaken 17 years ago. In addition, it was suggested that diverse and multifaceted countermeasures are important, such as "establishing the school education system in collaboration and cooperation with related organizations" and "construction of relationships between teachers and students based on the trust to each other".

Keywords: difficulties of classroom management, coping strategies, the factor analysis, managerial positions